



2010年12月22日放送

## 漢方医人列伝「浅田宗伯」②

北里大学東洋医学総合研究所 漢方診療部 星野 卓之

浅田宗伯は漢方医最後の東宮侍医として大正天皇の幼少期にお仕えし、「明治漢方最後の巨頭」、また「良医にして良相」といわれています。その学術は、日本漢方の流派としては折衷派に分類されておりますが、他の漢方医と同様に『傷寒論』を最も尊重しておりました。そのことは字や薬室号を見ればわかります。宗伯の字、識比は「此れを識る」と訓じ、『傷寒論』の桂枝湯の条文「常に須らく、此れを識り誤らしむること勿かるべし」の中よりとったものです。浅田宗伯は、病人に接して誤りのないよう、常に「此れを識る」ことを生涯の戒めとしました。また薬室号の「勿誤薬室」の「勿誤」は、「誤ること勿かれ」と訓じ、同じ条文の「誤らしむること勿かるべし」よりとっています。ここから現代日本漢方処方直接の原典ともなっている『勿誤薬室方函』や『勿誤薬室方函口訣』の書名が生まれています。

浅田宗伯の著作は膨大であり、かつ多彩であることで知られています。その著述活動は十六才から五十五才まで休まずに漢文で書かれた『曠日雑記』に始まり、他界した八十歳のときの遺作である『後芻言』に至るまで、およそ八十部、二百巻という膨大な数に上ります。また、多くの門人が写した写本なども入れると百部を超える数になります。日本歴代の医家の中でも浅田宗伯ほど著作を残したものは後にも先にもないのではないかと思います。

れます。そしてその内容を見ると臨床に直結する有益な著作の多いことがわかります。

治験集としてはフランス公使レオン・ロッシュの治験や諸大名及び大奥の官女の治療を載せた、『橘窓書影』が有名です。これ以外にも、例えば安政四年と六年（1857年と1859年）のコレラ流行時に書かれた『治瘟編』には、はじめにこの疾病の歴史と学説を述べた後、症状を詳細に記述し、病理についての考えを示して、それぞれの薬方と適応をあげ、さらに治験例を載せる体裁を取っており、まさに至れり尽せりの感があります。

現代日本漢方処方直接の原典となっている『勿誤薬室方函』は、浅田宗伯の常用処方集です。その内容は湯剤 616 方、丸剤 70 方、煉薬 22 方、膏薬 17 方、酒剤 7 方、座薬 4 方、洗浴剤 4 方で、この順に処方名を列挙して、その主治、つまり主に治す病状を掲げています。このうち『傷寒論』・『金匱要略』などを出典とする古方は 71 方だけで、日本由来の本朝経験方が 276 方に及んでいます。そしてこの秘伝口訣集である『勿誤薬室方函口訣』には、古方・後世方・本朝経験方の常用処方 579 方に対する運用目標を要領よく述べてあります。数ある口訣書の中でも最高のものとされています。

また医学史の分野になりますが、『先哲医話』では後藤良山・和田東郭・多紀元簡元堅父子など十三人の医術をとりあげ、その特徴を宗伯なりにまとめています。この著作の序文には、宗伯の学術に対する態度が次のように述べられています。

「少年の頃に先哲の書物を読んだが、その治療は時に粗く、時に厳密に過ぎて、自分の考えと合わないために最後まで読めなかった。しかし張仲景に従い数十年治療を続けた後に、再び先哲の書物を読んだ所、先哲が独自に達した本領というのを知り後悔している。結局、私は一家をなすことがなく、そのまま突き進んできた」と。つまり、昔の医家は独自の考えに偏って一家をなしたけれども自分はそうではない、ということ、謙遜の中にも自負を込めて述べています。この言葉の通りに、浅田塾の門下生に対しては、まず張仲景の『傷寒論』『金匱要略』から正当な学術を学ぶ方法を教えます。その態度は偏る所がなく、諸家の意見を聞きながらも自分の意見を通す形になっています。また当時の最新医学研究にも余念がありません。例えば『勿誤薬室方函口訣』の当帰鶴蝮散の条文には、西洋薬のセメンシイナの名が見られ、『医学典刑』には英国の医者合信の『西医略論』を引用しています。当時の中国、清の陳修園や徐大椿の医書なども読み、著書に反映させています。

次に浅田宗伯の塾の方針とそこで使用されていた教科本についてお話ししましょう。入門者にはまず『医学智環』という『傷寒論』・『金匱要略』のダイジェスト版を渡し、その諳誦を命じます。そして脈・病・証・治の四課を建て、まず脈については『脈法私言』、病については『傷寒弁要』・『雑病弁要』、証については『傷寒雑病弁証』、そして治については『古方薬議』・『傷寒翼方』・『雑病翼方』というように、それぞれに教科本を揃えました。そして四課会通の書として『医学典刑』という文献集も用意し、日常の参考にさせました。また図書選択の参考にさせるために、『医学読書記』という図書案内まで作成し、門下生を漢方の高みに学・術ともに導きます。そしてここで要求されているものを全て修得して、初めて、小さいに成ると書きますが、「小成」といわれました。その後によく『傷寒論

識』や『雑病論識』、『橘窓書影』など他の書籍に進むことを許されました。書籍の読み方や順番についても塾生一人一人に対して、丁寧に指導していたことがうかがえます。明治期において浅田塾は指導方針・テキストともに充実し、活況を呈しました。

七十才頃の宗伯の日常をお話ししましょう。朝四時に起きて書物を書き記し、八時から診療を始め、午後三時頃までに三百人の患者を診察します。この頃は一日の患者数が三百人を超えることもあり、「浅田の三百番止め」といって三百人で札止めをしました。診察以外に薬取りだけでも二百人いたため、一日五百人を受け付けていたことになります。薬の調合は四人で行い、初診患者には門人が予診を行った後、宗伯が門人の考えた処方ideよいかどうかチェックしました。診療が終了とすぐに駕籠に乗って往診に出かけますが、駕籠の中でも読書・執筆に余念がなかったといえます。そのうえ帰宅するのは夜になってからというから、七十才の齢にして気力体力ともにおそるべきものであったことが判ります。帰宅後も十二時ごろまで読書や著作の確認をしたといえます。浅田宗伯の超人的な活動はこれだけではありません。日常診療の忙しさのなか、宮中への参内や各地の漢方病院への出張、門人のもとへの応援、そして温知社運動というように奔走し、著書も出版し講義もして、漢方医会を先頭で牽引し続けました。

浅田宗伯の歿後一年、漢方医が提出していた医師免許規則改正法案が否決されました。その後、漢方医の存続運動は途絶えることとなります。

宗伯が死ぬ間際に発した言葉があります。「わが歿後五十年にして必ず古に復る」という言葉です。この予言は、宗伯の熱気ある漢方存続運動と門下生教育が細々ながらも力強く継承された結果、のちの昭和漢方隆盛期を迎えて実現することとなります。